ボランティア通信
～栗田谷中学校～

目次

AT、そして教師として
大切なこと
英語英文学科
4年　徳永上総

生徒を知る
人間科学科
4年　仲内彩

休み時間と授業の時間
の切り替え
情報システム創成学科
4年　宮崎晴夫

生徒への声のかけ方
人間科学科
3年　相川舞美子

授業の進め方と生徒へ
の接し方を観察して
人間科学科
3年　浅野孝俊

生徒目線での
学びやすさのために
人間科学科
3年　矢島芽以

ATとしての新生活
経済学科
1年　小林洸貴

子ども達と
ふれあいながら
法律学科
1年　田中　誠也

ATの立場になって
経済学科
1年　本田彩未

AT、そして教師として大切なこと

英語英文学科　4年　徳永 上総

「先生になりたい！」そう思って栗田谷中学校に飛び込んで、約2年が経ちました。これまで何度も自らの活動を振り返りながら、このボランティア通信を書いてきましたが、きっとこれが最後の通信となります。今、3年生の生徒たちは私がアシスタント・ティーチャー（以下AT）としての活動を始めたときはまだ1年生でした。今では、背も私よりもずっと大きくなり、内面的にも一回りも二回りも大きく成長したなと感じています。私はこの2年間で生徒たちと同様に大きく成長できたでしょうか。

栗田谷中学校のATに限らず、他の小・中学校のATと話をしていると「授業中に何をすべきなのかわからない」「子どもたちとコミュニケーションをとって、関係をつくっていきたいのだがうまくいかない」という話題がよく上がります。私はこういった目の前の悩みや問題をどうするか、ということの前にATとしての心得や必要不可欠な何かがあるのではないだろうかと思うようになりました。私は2年間の活動の中で、活動先の先生方が私たち大学生ATに求めているものは「教えるテクニック」や「専門的な知識」ではない、ということに気づきました。もちろん、教科の知識や個別指導の工夫も必要な場面はたくさんあります。しかし、それらよりもまずATが持っていなければならないものは、「教育への情熱」と「自ら学ぼうとする積極性」です。活動先の先生方は私たちが思っている以上にATのことを観察しています。未来の同僚になりうる先生のたまごとして、私たちのことを見てくださっている先生はたくさんいらっしゃいます。ATが一生懸命に生徒と関わろうとする姿を見たり、積極的に教科や生徒のことについて先生方に聞こうとしたりする姿勢などはしっかり評価してくださいます。しかし、先生方が丁寧にATの様子を観察してくださっている分、生半可な気持ちで生徒たちと向き合っていたり、消極的な受け身の態度で活動を行っていたりするようでは、先生方からはアドバイスなどもいただけないですし、当然のこと、ATを共に教える仲間として受け入れてはくれません。「情熱」と「積極性」はATに限らず、教師として学校現場に出ても必要不可欠なものです。「子どもたちに学ぶことの楽しさを知ってもらいたい！」というような情熱を持ちながら生徒と関わり続けると、いつか生徒たちも私たちの気持ちに気づきます。「先生方からたくさん教わりたいです！」というような積極性を持ちながら先生方と関わり続けると、先生方も本気で指導してくださいます。生徒や先生方との関係づくり、そしてよりよい教育はこの2つが私たちに備わっていないと成立しないのです。

近い将来、初めて教壇に立つ日、きっと私は緊張でこわばってしまうでしょう。そうなってしまったときには、2年間の栗田谷中学校で得たこれ以上ない貴重な経験を思い出し、自信を持って子どもたちの前に立とうと思っています。栗田谷中学校で学んだ、子どもに対して一生懸命に関わる情熱と自らたくさんのことを学ぼうとする積極性を持ち続けながら、これからの教員人生を歩みたいです。

生徒を知る

人間科学科4年　　仲内彩

このボランティア活動に参加し、約8カ月が経とうとしています。夏休み期間や週1回の活動、部活の大会等が重なり、まだ12回ほどの経験しかありません。私の担当する教科は保健体育で、毎週金曜日の午前中に参加させていただいています。この活動に参加したきっかけは、教育実習が近づき不安な気持ちがとても強く、教育実習に行く前に何かできることはないかと考えていた時にこの学校ボランティアが頭に浮かびました。教育実習先は高校ですが、現在の中学校の状況を把握し高校にあがるまでにどんな取り組みをしているのか、成長段階はどれほどなのかを把握するために中学校のＡＴ（アシスタントティーチャー）を希望しました。

活動をはじめたばかりは不安な気持ちしかありませんでしたが、最近では楽しいという気持ちの方が強くなりました。私が積極的にあいさつや声掛けを繰り返していくうちに、「私から生徒へ」だけでなく「生徒から私へ」という生徒からの声掛けも増えるようになりました。生徒が、以前よりも私に心を開いているのだと思います。また、自分に不安な気持ちがあると相手にも伝わってしまうということにも気づかされました。

そして、約7回の学校ボランティアを行い教育実習へ臨みました。少ない活動を終えての教育実習を迎えましたが、ＡＴをやっていたから気付くことがたくさんありました。教師行動や生徒に対する考え方、生徒の運動能力・発達状況などをある程度把握することができました。実習先の高校の状況が掴みやすかったです。また、中学生は学年によって変化の差が大きいように高校も同様に変化が見られました。一番驚いたのは、中学3年生と高校1年生の変化の大きさに驚き、たった1年違うだけでこんなにも変化・成長するのだととても興味深かったです。教育実習を終えて、改めてＡＴを始めて良かったなと感じました。

そして、私がボランティア活動を通して教育実習での目標にしようと決めたことがあります。それは、「生徒をよく知る」ということです。これを目標に掲げた理由は、栗田谷中学校でのボランティア活動の形態がきっかけです。栗田谷中学校では、担当教科以外の授業にも参加できるという特徴があり、保健体育の授業では見る・知ることのできない生徒のいろいろな部分を見つけることができます。実際にいろいろな教科の授業を見学し、保健体育の授業で自分をアピールできない生徒がいましたが、数学の授業では積極的に手を挙げて解答を発表したり、周りの生徒と協力している姿をみて驚きました。教育実習の初めの3日間は見学の期間だったため、自分の担当授業以外の空いた時間を使いあえて保健体育以外の授業を見学し、 保健体育では見ることのできない生徒の一面や保健体育でしか見られない一面を把握し、生徒の事を知るための工夫を行いました。このような体験は、正規の教員では中々体験することのできないことであり、3週間という短い期間の中で生徒を知るにはとても良い方法だと感じました。実際に他の実習生よりも早く生徒と交流を深めることができ、他の先生からもお褒めの言葉をいただきました。

教育実習を終えて、改めて学校ボランティアに参加して良かったなと感じました。7回という少ない活動ではありましたが、教育実習前に準備や明確な目標を持つことが出来ました。また、学校ボランティアに参加していなかったら生徒と仲良くなるのにも時間がかかり、担当教科以外の授業を見学しに行こうという考えも思い浮かばなかっただろうと感じます。また、3週間という短い期間をとても有効に過ごすことができました。人は得意・不得意があるため一つの場面でその人を判断し、この生徒はこういう人なのだと決めつけてはいけないのだと強く感じました。また、不得意なことでも積極的に行動できる場を設け、少しでも不得意・苦手から好きに近づけられるような教師になりたいと強く感じました。

残り少ないボランティア活動ではありますが、これからも一日一日目標を高く持ち、生徒とより良い関係を築き一つでも多くの知識を得ていきたいです。

休み時間と授業の時間の切り替え

情報システム創成学科　4年　宮崎晴夫

昨年度の2月から、栗田谷中学校の個別支援学級で学校ボランティア活動をさせて頂いています。1週間に1回、それも午前中だけという短い時間ですが、その中で少しでも多くのことを学べるように日々の活動を大切にしています。今年度の1学期は、生徒の動きや先生の動きに対して、自分で気づける点が少なく、先生からのアドバイスや解説を聞くだけの日も少なくはありませんでした。しかし、2学期に入ってからは自分で気づける点、そして気をつけなければならない点を見つけることができるようになりました。今回はその中の一つである休み時間と授業の時間の切り替えについて述べたいと思います。

2学期に入ってから、11月中旬の課外活動で行なわれるディスクゴルフに向けて個別支援学級にも、ディスクが置かれるようになりました。生徒は休み時間になると、教室の端から教室の一番奥にあるカゴにディスクを投げてディスクゴルフに向けての練習を行なっていました。私は最初、生徒の様子を見ているだけでした。しかし、生徒から「先生も一緒にやろうよ」と誘われ、その日以来、休み時間は生徒と共にディスクを投げていました。休み時間に生徒と遊ぶことで、生徒の普段見ることのできない笑顔や、楽しそうにしている顔を目の前でみることができるようになりました。そして、生徒と楽しく時間を共有することができたのは私にとって、2学期になってからの一番大きな喜びでした。

このことで，生徒との距離は1学期に比べて更に近づきました。このとき私が2学期の課題にしていかなければならないと感じたことは、休み時間の生徒との距離と授業中の生徒との距離をそれぞれ大切にするということです。このことは、生徒と休み時間に遊ぶことが多くなった時に自分で気付いたことです。 休み時間に生徒と遊ぶことが増えても、授業にもその雰囲気を生徒が引きずるようなことがあってはいけませんし、教師自身もそのようなことがあってはいけません。授業は授業、休み時間は休み時間という切り替えを生徒も、自分自身もできるようになることが私の2学期の学校ボランティア活動での課題です。

休み時間でも授業の時間でも私は生徒と真剣に向き合います。ただ、その向き合い方が休み時間と授業の時間で変わってくるので、その違いからより良い関係を生徒と共に築いていきます。

生徒への声のかけ方

人間科学科　３年　相川舞美子

私は、今年の４月から栗田谷中学校のATを始めました。前期は主に専門の体育を見させていただき、後期に入ってからは体育以外の授業も見させていただく機会がありました。技術や家庭科、国語等、懐かしいと思えるものもあり、楽しい反面専門的な知識がないという面では少し不安もありました。

１年生の家庭科の授業で、この日はグループごとにお弁当の中身を考えるという内容でした。グループワークで話を進めていく上で、上手く話し合いが進んでいるかクラス全体を見て回っていたところ、ひとつだけ上手くできていない班がありました。別の班の生徒と遊んでいたり、やらなければいけないのはわかっているけれど、上手く進められていないというような状況でした。そこで私は話し合いを進めてもらいたいと思い、リードするように質問をしたりしました。最初はグループで班員の意見を共有してもらうことから始めました。「Aさんはここなんて書いた？」や、「B君は○と□どっちがいい？」というように、生徒が答えやすいような質問にしました。すると、質問には答えを返してくれ、そこから班員で何とかしていこうという意欲が出てくるのが感じられ、グループ活動が進んでいきました。答えを言ってしまうのは簡単ですが、生徒を導くようにあれこれ考えて言葉を選び、生徒がやる気を出して自ら進んで話し合いを進めていけるようにリードしていくことの難しさを実感しました。

また、同じ日に、別のクラスでもグループワークの時間があり、こちらは保健の３年生女子の話し合いでしたが、慣れたように進んでいて感心しました。これができるようになるのも、１年生の時から少しずつそのような機会を持つことが大切になるのだと思いました。私は専門が保健体育ですが、実技だけでなく、保健の授業も両方できての保健体育科なので、今回のように話し合い等でリードしていくことは保健の授業でもあるだろうし、また、実技においてもリードしてやる気を起こさせるという点では、変わらないのではないかとも思いました。

グループワーク時でもそれ以外でも、生徒によって声のかけ方を変えることが必要だと思いました。同じように、質問しても返ってくる答えは一人一人違うので、同じ意味だけど違う言い方、それを見つけ発するには自分のボキャブラリーの引き出しを多くしていかないといけないと思いました。そのためにも日頃からボキャブラリーを増やしたり、AT時に先生の言葉かけに注意したり、生徒とのコミュニケーションの中でいろいろなものを見つけていきたいです。

授業の進め方と生徒への接し方を観察して

人間科学科　３年　浅野孝俊

夏休みが終わり、ATに行った時、1年生はだいぶ学校に慣れたこともあり、クラスの雰囲気が前期より明るく、先生ともだいぶ打ち解けている印象でした。

前期の初めの頃は先生と話すのも抵抗があり、先生もまだ入学して間もない生徒にどう警戒心を解くか悩んでいました。また、どう友達を作り、学校生活を送っていくか模索状態でした。それが6月位の時期になると生徒同士のコミュニケーションもとれるようになり、生徒の性格や行動が表せられるようになったためクラス内の活気がついてきました。しかしそれと同時に授業を進行する上で先生は少し困惑しているようでした。それは、クラス内の活気が授業のモチベーションには中々繋がらなかったからです。7月の時点では1年生の体育種目は水泳だったため、生徒は関心・意欲が非常に高かったです。しかし水泳の前のマット運動の分野になると技が出来る人は積極的に新しい技に挑戦する姿勢が見られましたが、出来ない技がある生徒は、「どうせ自分はマット運動が苦手だからいいや」などといったネガティブな考えが働いてしまい、授業中に友達と走り回ったり、マットの上で寝転んでいたりというような行動をしていました。後期の柔道も同様に技が上手く出来る生徒は積極的に組手を行い、技がかからない生徒はネガティブな思考が働き、他の生徒のちょっかいを出したりする場面が見られました。

この年代はいわゆる思春期を迎えている生徒もおり、「出来ない＝恥ずかしい」という関係が成り立ってしまっているため、生徒の体育への関心・意欲の部分に差が出てきてしまうというのを感じました。その差が出てしまうと技能の面でも差が出てしまい、結果その単元に苦手意識を持ってしまうといった事に繋がりかねません。そういった状況にならないように、先生は、技が出来ない生徒に対して基本的な技能面での声かけをしていました。創作ダンスの授業においてはやはり、男子の生徒は恥ずかしいという感情が強いため、取り組みはじめが遅かったです。この単元の場合、先生はあえて声かけをせず取り組みが早いチームとの差を感じさせ、取り組みの遅いグループも頑張って追いつこうという授業スタイルをとっていました。このように体育の授業には様々な授業の運営の仕方があると実感しました。

これからのATにおいて私は、後期の授業は前期とは違い、ネット型やゴール型の球技の授業が行われるため、前期に引き続き、どこに注意を向け、生徒の授業の進行度合いに対して、どのような声掛けをしているかという観点で学んでいこうと思います。

生徒目線での学びやすさのために

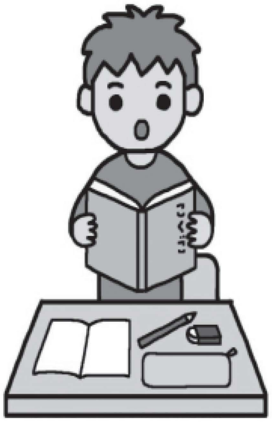
人間科学科　3年　矢島芽以

早いもので、１年生の冬から栗田谷中学校の個別支援学級に行き始めて１年半以上が経っていました。生徒が卒業したり、新しく１年生が入学したりと若干の環境の変化がありましたが、私自身個別支援学級のＡＴに慣れてきたように感じています。そのため、今年からは一般学級にも週に１時間行くようになりました。

一般学級に行き始めて第一に感じたことは、個別支援学級とは全く距離が違うことです。個別支援学級では人数が少ないため、一人一人と話すことができます。しかし、一般学級ではもちろん私の行っている時間が短いという理由もありますが、なかなか一人一人を見て話すことは難しいと感じました。なぜなら、授業時間しかいない私は生徒にとってはＡＴの名札を掲げた見知らぬ人だからです。たとえどのような人か気になっていたとしても、なかなか話しかけづらいよくわからない存在だろうと思います。だから、私は授業の見学だけではなく生徒が親しみやすいと感じる自己開示をしていかなければならないと考えました。今期は授業の時間しかいられなかったため、サポートに徹しました。例えば、消しゴムを落としていたらすぐ拾って渡したり、教科書のページを開けていない生徒がいたら教えたり、問題が解けない生徒がいたら一緒に考えたりといったことです。少しでも効果がでたのか、続けるうちに生徒から授業内容のわからないところを直接質問されるようになりました。今後は授業時間以外にもクラスに顔を出し、より生徒と交流ができるようにしていきたいです。

第二に感じたことは、個別支援学級とはまた異なった「生徒目線」を意識した先生の気遣いです。例えば、生徒は無意識だと思いますが、先生が黒板に書くものは全てノートに写そうとしてしまいます。それに対して先生が「ここは大事だからノートにとって」や「今から言うことはノートに書かなくていいよ」など指示を出すことで、生徒は集中して聞くところ、書くところがよく理解できていました。他にも生徒が大事なところをわかりやすくするためにチョークの色を変えることや、授業の内容に関連した雑談を取り入れること、質問をして生徒がわからなそうならば質問の材料を増やし答えやすくすることなど、生徒が学びやすくするための気遣いを感じました。先生が前もって準備して授業を計画しているからこそできていることだと思います。

今期はあまり一般学級に行けず授業中の交流しかできませんでした。これからはサポートをするにあたり、より近い環境で教えられるように授業時間以外にもクラスを覗き、少しずつでも話すことができたらと考えます。なぜなら、これから教育実習に行くにあたり、私は生徒一人一人のことを思い、「生徒目線」での学びやすい工夫や気遣いをしていきたいと考えているからです。栗田谷中学校でのＡＴを通してそういった工夫を学び、私自身に取り入れて良い実習にしていきたいです。そのために、今私ができる経験をこれからもたくさんし続けていきたいと思います。



ATとしての新生活

経済学科　1年　小林洸貴

私がATとして栗田谷中学校に行き始めてから先週で三回目となりました。したがって、初めて中学校に行った日のことは、今でも鮮明に思い出すことが出来ます。

その日は雲一つなく、ただ青い空がどこまでも続いていました。私は、これから始まろうとしている中学校での夢と希望に満ち溢れる生活を思いながら、青空の下、中学校へ歩いていました。

しかし、そんな夢と希望も数分後には、打ちひしがれるのでした。中学校について最初に感じたのは恐怖心でした。いくら年が近いといっても中学校を卒業して四年、自分が中学生の頃なんてものはすでに忘れてしまっていました。どのように話しかけたらいいのか分からない。まず、話しかけたら答えてくれるのか、それでさえも不安でした。

初めは生徒に声をかけることが出来ず、ただ授業中も教室の後ろで立っているだけの柱の様な存在、というより存在しているのかもわからなかったと思います。当然ATとしての責務を果たすことが出来ませんでした。

このままではいけない、そう思った私がまずとった行動は、存在感を高めるということでした。その方法とは、教室の中を歩いて回ることでした。もちろん、これは問題演習の時だけですが、効果は大きかったと思います。後ろに立っているだけでは生徒のみんなの目に入らず、存在していない同然の状態でした。しかし、教室の中を歩くことにより、自分の姿を生徒に見てもらうことにより、私の姿を認識してもらいました。

そして、存在感を高めたあと、次にとった行動は、声をかけることでした。たとえそれが会話までつながらなかったとしても、この人は先生なんだ、質問してもいいんだ、そう思ってもらえると、また次の機会は生徒のみんなから質問していくと思ったからです。

狙いは当たりました。こうした地道な活動により、今では「せんせー！！」と私の目を見て呼んでくれるようになりました。その一言で、私は一種の快感とも言える嬉しさを覚えました。そして、教師という職業の本当の楽しさを知ることが出来るようになりました。

しかし今でも声をかけるのが少し苦手です。以前よりはできるようにはなりましたが、まだ不十分だと感じています。しかし先はまだ長いです。少しずつ生徒とのコミュニケーションをとり、生徒との信頼関係を築いていきたいです。

子ども達とふれあいながら

法律学科　1年　田中誠也

学校ボランティア活動に関しては、活動回数は少ないですが、流れについてはだいぶ把握できてきました。ここで一旦振り返りをしてみようと思います。

まず、何故私が学校ボランティアをやろうと思ったか、それは、自分が将来中学校教師を目指していることが大きな理由です。このボランティアの活動の中に中学生のアシスタントティーチャーがあり、「これはもうやるしかない」と思いました。実際の職場を体験できるというのはとても貴重な経験です。だから、参加しました。

ボランティア活動に参加する前は、期待と同時に不安もありました。生徒達と深く交流を持てるかどうか、担当の中学校の先生とコミュニケーションがとれるかどうか、いろいろなことが頭の中を巡りました。そのような事を心に募らせながら、初めてボランティア活動に参加しましたが、それはもはや杞憂に終わりました。１－１の家庭科の時間には、自分から積極的に生徒に話しかけていきました。最初は戸惑いの表情を見せましたが、徐々に心を開いてくれたのかどんどん会話が弾んでいきました。しまいには「先生リンゴの皮食べる？」といったユーモアあふれた発言ももらい、生徒ととても親密な関係になれた気がしました。また、教師とのコミュニケーションも充実したものでした。一年生の国語の時間、担当の先生が私にいろいろ質問やリクエストなどをくださり、まるで２人で一つの授業を作り上げてるような感覚でした。子ども達とふれあっている時間は、自分の夢である教師になれているような感覚にさせてくれます。

当初掲げた「生徒と積極的にコミュニケーションをとる」という目標は自分の中では達成できたかな、と感じます。今後はこの目標を継続していくと共に、新たなステップとして「生徒に対して、先生方はどのような対応をとっているのかをしっかり観察する」という目標を付け足していきたいと考えています。一人一人個性を持った集団をどうやってまとめていっているのか、そこを重点的に観ていきたいと思います。

ATの立場になって

経済学科　1年　本田彩未

私は10月から栗田谷中学校でATをやらせて頂いています。はじめて学校で生徒ではなく、仮ですが先生としての立場になりました。毎回学ぶことがたくさんあり、まだ日は浅いですが、やりがいを感じています。先生方の工夫や生徒の態度、クラスの雰囲気などが十人十色でとても楽しいです。

先生方は手振りや黒板を使って図を描いたりして、より生徒たちに理解してもらおうと工夫していました。また、話し方も親しみやすい言葉で生徒たちにも分かりやすいようにしているのだと思います。例えを出すときもできるだけ生徒の目線に立った身近なものを出すのが良いと知ることが出来ました。生徒を指名した時には正誤に関係なく生徒の意見を尊重していたので、それは当たり前の事かもしれないが大切なことだと思いました。それを踏まえてクラス皆で何が正しいのか考える時間を設けていたので私が教師になれた際にも是非取り入れていきたいと思える取り組みでした。生徒たちもきちんと板書を写していたので真面目な学校なんだという印象を受けました。先生とのコミュニケーションも自然にとれていたので、先生と生徒がお互いに良い雰囲気を作り上げているのだと感じました。

実験や作業をする授業では生徒一人一人をみて、先生の言っていることができているかを確認したりしました。私自身も間違えないように注意して教えなければいけないので、とても緊張しました。しかし、それ以上に先生、生徒たちは大変だと思うと頑張ることができました。私自身もっと生徒と触れ合えるように努力していかないといけないなと感じました。そして皆が楽しい学校生活が送れるようにサポートできたら、と思います。

私は以前までは生徒の立場でしか教育を受けてきませんでした。しかし今はATという立場に立っています。視点を変えて物事をを考えることは大切だと言いますが、私は今、その大切さを実感しています。考え方やものの見方が広がりました。生徒の立場だけで考えると授業なんて面倒だと思っていたこともありました。しかし先生側に立ってみると、先生は授業のためにこんなにも工夫や努力をしてくださっていたのだと感謝の気持ちがあふれてきます。ATをやってみて最初は心配なことばかりでしたが、とても自分のためになると思いました。生徒と触れ合うことは生徒一人一人を理解することにもつながる上、理解することができれば自然と信頼関係ができるので、より良い雰囲気作りにもつながります。そのため、少しずつでも生徒と触れ合い、良い雰囲気作りに貢献していきたいと思います。

また先日若手の先生方との懇談会がありました。私の知らないこと、見えない努力などをお話しくださいました。それらを聞いて正直自分がこの道を貫いていけるのか不安になりました。でも教員になって後悔することは決してないとも気づかされました。まずは「がむしゃらに当たって砕けろ」が一番簡単で且つ近道だと知ったので、これからATで行かせていただく際にはどんどん実行に移していきたいと思います。

発行日：2015年2月14日
発行所：神大ユース・サポート・プロジェクト（ＪＹＳＰ）
ＴＥＬ：０４５－４８１－５６６１（内線４３５２）
ＦＡＸ：０４５－４１３－４１５４
Ｅ－ｍａｉｌ：jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp
ＵＲＬ：http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/jysp/